「元初まりの話」に登場する動物たち（27）

「かれい」について②

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

今日、「左ヒラメの右カレイ」と言われるが、それは昔から言われていたことではないらしい。

『本朝食鑑』(1697 年) や『和漢三才図会』(1712 年) では、「ヒラメ」と「カレイ」はとくに区別されていなかったという。たとえば、『大和本草』（1709 年）では、比目魚（今日ではヒラメを意味する漢字）を「カレイ」、ウシノシタを「ヒラメ」とするなど、呼称は定まらず、混乱していたようである。

また「ヒラメ」と「カレイ」の呼称は、地域によって真逆の場合もある。俳諧師・越谷吾山が江戸時代の方言辞典として刊行した『物類称呼』(1775 年）によると、常陸の上総・下総では大きいのを「カレイ」、小さいのを「ヒラメ」と言い、逆に江戸では大きいのを「ヒラメ」、小さいのを「カレイ」と言っていたという。そして、畿内・西国では両方とも「カレイ」と言っていたという。

ところが、尾張藩士の天野信景（1733 年没）は、『塩尻』の中で、背面から見て両目が右側にあるものをカレイ、左側にあるものをヒラメと記していたが、それが尾張地方で普遍的な呼称だったかどうかは定かでない。

いずれにおいても、幕末の頃は、総じて、「ヒラメ」と「カレイ」は区別せず、むしろ両者とも「鰈」と呼んでいたのではないだろうか。「息吹き分け、風」の道具として定められたかれいは、「ヒラメ」や「カレイ」ではなく、「鰈」と想定して考えても良いと思われる。

ちなみに、ウシノシタはヒラメとはまったく異なる魚だが、ヒラメのように体は平たく両目も片側についている点では同じである。分類学的にみると、ウシノシタはカレイ目のウシノシタ科とササウシノシタ科の２科に分けられ、前者は両目が左側に、後者は右側にある。また、後者のササウシノシタ科のほとんどは小型で（写真１）、味は前者のウシノシタ科よりも劣ることから、その多くの種類は漁の対象になっていない。

写真１. ササウシノシタ科のセトウシノシタ。右側に両目がある。「ぼうずコンニャク」のホームページより引用。

「鰈」の泳ぎ方

「鰈」は、形態は木の葉のように扁平で、両目は黒褐色の表側部分に位置し、白色の裏側部分とは色彩や形状がまったく異なる。多くの種は海浜や海底の砂泥地を好み、浅い海から水深数 100m の深い海にかけて広範囲に分布する。その活動域に生息する小魚などを主に捕食する。

このように、「鰈」は近海に生息し、比較的身近な魚として認識され、昔から食卓にも上がっていた。それは、『和漢三才図会』の「鰈」の項に、星鰈（ホシガレイ）、石鰈（イシガレイ）、瓶子鰈（マコガレイ？）、目板鰈（メイタガレイ）、島鰈（シマガレイ）などが紹介されていることからも明らかである。

幕末の頃であっても、身近な魚で、浅い海の砂泥地で観察できる「鰈」の泳ぎ方を見聞きする機会は、多かったはずである。それは、魚の中でも珍しい泳ぎ方をするからである。

身近な川で泳ぐモロコやフナ、メダカなどの魚類には、背びれ、尾びれ、尻びれ、腹びれ、胸びれがある。それぞれには泳ぐさいの役割がある。尾びれは「推進力」の要として重要であり、背びれと尻びれは進むさいの「舵」と「バランス」、腹びれと胸びれは「バランス」として必要であり、とくに胸びれは方向転換のさいには重要な役割を担う。なかでも、泳ぐさいとくに重要なのは尾びれで、団扇のように左右に動かす時にできる推進力は、天敵から逃げるさいの速さにも影響を及ぼす。尾びれの働きは、まさに生死を分けるほど重要なのである。

一方、「鰈」の泳ぎ方はどうだろうか。団扇のような上下の動きが推進力となることは確かだが、一般的な魚類のように尾びれだけの上下運動では、推進力は乏し過ぎる。「鰈」は、尾びれを含むからだ全体をまるで１柄の団扇をあおぐように、波を上下に送ることで推進力を高めて移動するのである（写真２）。

写真２. 水中で泳ぐヒラメ。New Jersey Scuba Diving のホームページより引用。

また、「鰈」が泳ぐ姿は、風によってはためく旗のようであり、息を吹き付けられて揺らめく薄い紙のようでもある。吐く息も吸う息も、あるいは呼気も吸気も、それは風の流れそのものであり、「鰈」の泳ぐ姿は、風の流れを十分に連想させる動きである。どのように吹き分けられたとしても、息は息であり、風なのである。

また、「息」には「いのち」の意味もある。「いき（息）」から派生して「いきる（生きる）」という表現が生まれたという（『日本語語源大辞典』、2005 年）。生命体が「いのち」を長らえるためには、体内の循環システムを維持させなければならない。その最も重要なシステムの一つが「呼吸」である。生命体は「呼吸」、すなわち「息」をしなければ「いのち」を維持できない。「息」とは呼気と吸気であり、風の流れである。

私たちは「息吹き分け、風の守護の理」の象徴的なものを、水中を泳ぐ「鰈」に見出すことができるのではないか。また、「呼吸」という風の流れをとおして、「いのち」に流れる「風」の重要性を知ることができるのではないか、と考える。